

未来社会創造事業 探索加速型  
「世界一の安全・安心社会の実現」領域  
H30 年次報告書(探索研究)

H30 年度 研究開発年次報告書
---------------------

平成 30 年度採択研究開発代表者

[研究開発代表者名：日下 菜穂子]

[同志社女子大学現代社会学部・教授]

[研究開発課題名：情報活用による高齢者のシェアダイニングの構築]

実施期間：平成 30 年 11 月 15 日～平成 31 年 3 月 31 日

## §1. 研究開発実施体制

(1)「研究代表者マネジメント/健常高齢者食行動ワーキング」グループ(同志社女子大学)

① 研究開発代表者:日下 菜穂子 (同志社女子大学現代社会学部、教授)

② 研究項目

(ア) 食行動ワーキンググループの形成

① 健常高齢者グループの立ち上げ・グループミーティング

② 食行動の分析・評価法の検討

(イ) 食の意欲向上・ICT 活用を促進する技法、学習法の開発

① ワークショップの実施・地域展開

② 高齢者の ICT 学習環境デザイン、学習会の開催

(ウ) シェアダイニングの実装

① ツール開発・実装の検討

(2)「認知症当事者食行動ワーキング」グループ(京都府立医科大学)

① 主たる共同研究者:成木 迅 (京都府立医科大学大学院医学研究科、教授)

② 研究項目

食行動ワーキンググループの形成

・認知症当事者のワーキンググループの立ち上げ

・高齢者の食行動の調査・分析

## §2. 研究開発実施の概要

探索研究期間の平成 30 年度は、高齢者と協同するアジャイル型共創開発により①社会実装に向けた活動の設計、②食行動の意欲とコミュニティ参加に働きかけるコンセプトの明確化、③高齢者の情報活用へのインセンティブを高めるシステム開発の 3 点に重点を置いた研究開発を行なった。

① 当事者である高齢者との研究開発体制を整えるために、地域高齢者のワーキンググループを立ち上げ、食に関する意識の把握を行なった。また、ワーキンググループの参加者を対象に、企業との連携による食のワークショップを実施し、介入の有効性を確認した。認知症当事者行動解析グループでは、認知症発症による食行動の変化について検討するために、京都府立医科大学附属病院通院患者において診療録を後方視的に検討する準備を行った。また、認知症の人に料理を通じてグループを形成する場合の留意点についての専門知識の提供を受けるなどで情報収集した。

- ② シェアダイニングでの情報活用が社会的価値を生み、自然と人がコミュニティに参加できるコミュニティ参加行動を促す条件と過程を作成した。その条件を反映するツールとして、調理台を組み込んだテーブルおよび、調理器具の開発を進めた。開発中のツールを用いたワークショップを実施した。ワークショップでの参加者の食行動の記録と解析法を検討するとともに、ワークショップの際の行動観察から8条件の妥当性を検討する資料を得た。
  
- ③ 調理場面におけるグループ内の共感行動を促す情報活用のシステムを検討した。さらに、シェアダイニングにおいて調理行動を共にする人たちのコミュニケーションを分析する指標として、コミュニティ全体の能力を把握する仮説モデル(With All Intelligence)を設定した。シェアダイニングの行動の記録と情報活用に関する研究の推進に、新年度から大阪工業大学を加えた研究体制を再編成した。